



2 あぶら山

でんとうの あかりも なかった
むかしの こと。あぶら山と いう、
小さな 山の いわかげから、ちろち
ろと あぶらが ながれ出て、くぼみ
に たまっていたと。

おかげで 村人は、あぶらを さらに
入れ、しんに 火を ともして、
よる おそくまで しごとが できた。



「あぶら山さまさま。」

と、村人は 手を あわせ、その 日 ひとばんぶんの あぶ
らだけを、あぶらざらに たいせつに くん で かえったと。

こんこんと ゆきが ふりつもる 日、一平いっぺいと いう わか
ものが、とうさまに あぶらくみを たのまれた。一平は、口
を とがらせて、

「いくよ、いくよ。でも、こんな さむい 日に、まいばんな
んて いやだ。なん日ぶんも、いっぺんに くめば いいの
に。」

「それは いかん。あの あぶらは、どこの いえでも その
ばん つかうぶんしか くん で こない やくそくに なっ

て いるのじゃ。」

とうさまに しかられて、あぶ
ら山に やって きた 一平は、
だあれも いないのを さいわい
に なべ いっぱいに あぶらを
くんで、うらの 竹やぶに そつ
と かくした。そして、ペろりと
したを 出して、

「おれは なんて かしこいんだろう。」

ところが ある タがた、一平が なべ いっぱいに あぶ
らを くんで きた ところを、となりの じいさまに 見つ

かって しもうた。

「やっ、一平。そんなに あぶらを
くんで、あぶら山の あぶらが な
くなったら、どうする。」

「なくなるものか。ためしに じいさ
まも、大きな なべで くんで み
たら どうだい。」

へらへら わらって 一平が いっ
て しまった あと、となりの じい
さまは かんがえた。

(ふむ。一平の いうのも もっともじゃな。)



そこで、じいさまが　こそこそと、なべに　あぶらを　くん
で　かえって　きたら、なんと、その　また　となりの　ばあ
さまに　見つかって　しもうた。

じいさまは　あわてて、
「い、いや、一平も　くんで
おつてな。しかし、あぶら
は　なくならん。ばあさま
も　どうじゃ。」
ばあさまは、目を　まるく
したが、ひとりごと。
(一平も、となりの　じいさ

まも　やってる　こと。わ
たしも　ひとつ　大きな
なべで……。)
こうなると、もう　村の
みんなが　なべを　かかえて
くみはじめた。



こうして　しばらく　たつと、あぶ
ら山からは、一てきの　あぶらも　出
なくなり、村は　すっかり　さびし
く　なつて　しもうた。



2 あぶら山

4-1) みんなが使う物を大切にし、約束やきまりを守る。(規則尊重、公德心)

1) 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

きまりは、集団生活を円滑に送るためにつくられたものであるが、ときには、個人の都合や利益と対立することがある。しかし、集団の成員がきまりを守らなければ、個人も平穏な生活を送ることはできない。社会生活を送っていく上で規則やきまりを守ることは、大切なことである。みんなで使う物を大切にし、他人に迷惑をかけない態度は、集団生活を楽しく豊かなものにしてくれる。さらにきまりは、みんなのためのものであるとともに自分のためのものでもあることに気付かせ、公德心や社会規範を守ろうとする態度を育てたい。

〈子どもの実態について〉

学校生活の中で、たくさんのきまりは、集団生活をする上で必要なものであることを子どもは理解している。しかし、まだ自己中心性が強く、自分勝手な行動をとることが多い。

いけないこととわかっていながら、面倒だからとか誰も見ていなければわかりはしない、と

いった気持ちを抑え、約束やきまりを守り明るい心で過ごそうとする態度を養いたい。

〈資料について〉

夜の電灯がわりになっていた油を、あぶら山から一晩分だけ汲む、という村のおきてを破って、一平はそっと何日分もの油を汲んでくる。それを見た村人たちは、まねて次々と汲んでしまい、とうとう油山から一滴の油も出なくなってしまうという話である。気持ちのよい集団生活を送るためには、公共物を大切にしなければならぬことや、公共物を使う上では、「他の人もやっているから」「だれもみていないから」といった独りよがりな理由で約束事を破ることは、社会生活全体をも乱して取り返しがつかなくなることもあることを理解させ、規則やきまりを守ることの大切さに気付かせたい。

2) ねらい

みんなが使う物を大切にし、約束やきまりを守ろうとする心情を育てる。

□ 板書

あぶら山

あぶら山は一つきりでもなくなる

じいさまは かんがえた

こんなにさむいのに...
まいばんなんて めんどろいだ

やくそくだから そんなのいけない。
一平のいうとおりかも...。
じいさんだけまもるのはそんだ。
ほかの人もしているし...。
みんながしているから...。
じいさんだけまもるのは、ばかばかしい

3) 展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 暗くした部屋で、明かりを灯し、明かり取りのためのあぶらがどういうものであったか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 暗い中でのこの明かりについてみんなはどう思いますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 明るいなあ。 ・ 真っ暗だと何もできない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電灯のない時代の明かりとして大切にされたあぶらであることを知らせ、資料への興味関心がもてるようにする。
<p>(2) 資料「あぶら山」を読み、話し合う。</p> <p>① 一平は、どうしてとうさまの言いつけを守らなかったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ こんなに寒いのに、何度も行くのはいやだ。 ・ 毎晩汲みにいくなんて、面倒くさい。 ・ 誰も見ていないから、分からないだろう。 <p>② 「じいさまは考えた。」とは、どんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 一平のいうとおり、あぶらはなくなるかも。 ・ でも、一晩分だけという約束がある。 <p>③ じいさまや、ばあさまは、どんな気持ちで鍋いっばいあぶらをたくさん汲んで帰ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ わたしだけでないから……。 ・ 他の人もしているのに、自分だけ守るなんてばかばかしいな。 <p>④ 一滴のあぶらもでなくなったとき、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 困った、あんなことするんじゃないかった。 ・ 約束を守っていればよかった。 ・ 自分がしなければこんなことにはならなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主人公の気持ちに共感できるようにする。 ・ どうしようかと迷う心の葛藤に体験を重ね合わせて考えることができるようにする。 (葛藤劇を取り入れてもよい) ・ 二人とも自分さえよければよい、自分だけ守るのはばかばかしいといった気持ちをもっていることに気付くことができるようにする。 ・ 自分たちにとって、約束やきまりを守るということはどういう意味があるのかを考えることができるようにする。
<p>(3) 自分たちの生活を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ みんなが使う物をどのように使っていますか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ブランコで遊ぶときは、交代している。 ・ 水道の水をむだづかいしないようにじゃ口をきちんとしめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な経験を思い出して考えることができるように助言する。 ・ そのときの気持ちも言えるようにする。 (心のノート P68～71)
<p>(4) 教師の説話を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誰も見ていない所でも、きまりを守って、みんなが使う物を大切に使っている子どもの話をする。